

作物名：ねぎ
病害虫名：さび病（病原：*Puccinia allii*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 主に葉に発生する。はじめ、紡錘形～楕円形で橙黄色の少し盛り上がった斑点（夏孢子堆）が生じ（写真1）、やがて斑点部の表皮が中央から縦に裂け（写真2）、中から橙色の粉状の孢子（夏孢子）が飛散する。まれに、花梗及び花卉の表面にも発生する。
- 被害がひどい場合は、葉全面に橙黄色斑点を生じ、葉は黄白色になり枯死する場合がある。
- 晩秋には黒褐色斑点の冬孢子堆を生じ、越冬する。



写真1 葉の病徴

2 伝染源・伝染方法

- 被害植物上で夏孢子や冬孢子的状態で越冬し、翌春の第一次伝染源となる。その後は、発病葉上に形成された夏孢子的の飛散によって二次伝染を繰り返す。
- 冬孢子は空気中に飛散して、葉や花梗の気孔から侵入し約10日間で発病し、夏孢子を形成する。
- ネギのほか、タマネギ、ニラ、ニンニク、ラッキョウに寄生するが、寄生性に分化があり、ネギのさび病菌はネギとタマネギに寄生性が強い。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で、担子菌類に属し、夏孢子と冬孢子を形成する。夏孢子は球形ないし卵形で橙黄色をしており、発芽適温は9～18℃で、24℃以上で少なくなる。冬孢子は長楕円形ないし倒卵形で、淡褐色である。
- 本病の発病適温は15～20℃であり、湿度は100%が最適で、95%では少発生となる。
- 発病に必要な湿度の保持時間は10～20℃では6時間である。ただし、感染時の温度が25℃以上の場合は湿度保持時間がいくら長くても発病しない。潜伏期間の温度も25～30℃の高温では発病に至らない。
- 潜伏期間は5～10℃では14日以上、20～25℃では8日以内である。
- 春から秋にかけて発生するが、夏の高温期には一時終息する。春季と秋季の比較的低温で降雨が多いと発生が多くなる。

4 防除方法

- 気温が25℃以下で高湿度が続くと発生しやすいので、このような天候が予想される場合は、保護殺菌剤により予防防除を行う。
- 多発してからの防除では効果が得られ難いので、発生初期の防除を心がける。
- 被害残さは伝染源となるため、ほ場外に持ち出して土中深くに埋設するなど適切に処分する。
- 極端な肥料不足や多肥は発生を助長するので、適正な肥培管理により、健全な生育を確保する。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編3-②（農文協）
- 農業総覧病害虫防除・資材編4（農文協）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 さび病の病斑（夏孢子堆）

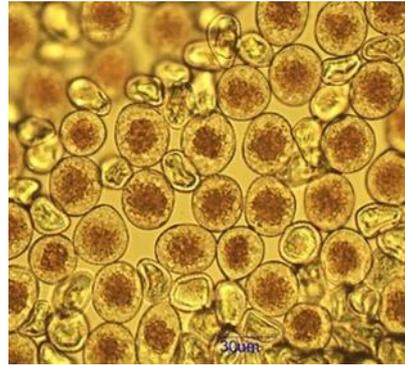


写真3 さび病菌の夏孢子

（令和5年9月改訂）